



大学入試は、諸悪の根源である。だれもがそう思っている。入試はなくてはならない。それどころか、制度をいじるたびに、受験競争はかえってひどくなってきた。根本的な改革に取り組まなければならない。

代わる仕組みを考える

大学入試がなくならないのは、それが一定の役割を果たしてきたからだ。これをスクリーニング(人材選抜)機能という。企業が採用を決めるのに、出身大学を目安にする。むしろ入試をパスしたのだから、仕事もまあできるだろう。安直だが、企業にとっては手間が省ける。これに代わる仕組みを工夫しないと、入試はなくなせない。

文部省は、入試をなくす気があるのか。期待できないと思う。中教審の答申には「過度の受験競争を緩和する」とある。「適度な受験競争ならあってよい」と認めてしまっている。文部省に改革を任せられないのなら、国民が立ち上がるしかない。

大学入試のおかげで、偏差値による大学ランキングが、日本人の頭のなかにしみついていて。よい大学、一流大学とは、入試の難しい大学のこと。教育や研究のレベルは、どうでもよい。入試偏差値が高ければ、大学もそこに勤める教授たちも、ラ

# これでなくせる大学入試

橋爪大三郎 東京工業大学教授(社会学)



はしづめ・だいさぶろう 1948年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。95年から現職。著書に『はじめての構造主義』、神谷勇治氏との共編著『研究開国』など。社会経済生産性本部の教育改革案作りに携わった。

## 学生定員を廃止する

## 多めに入学試験で絞る

## 奨学金を全員に貸す

大学入試は、諸悪の根源である。だれもがそう思っている。入試はなくてはならない。それどころか、制度をいじるたびに、受験競争はかえってひどくなってきた。根本的な改革に取り組まなければならない。

代わる仕組みを考える

大学入試がなくならないのは、それが一定の役割を果たしてきたからだ。これをスクリーニング(人材選抜)機能という。企業が採用を決めるのに、出身大学を目安にする。むしろ入試をパスしたのだから、仕事もまあできるだろう。安直だが、企業にとっては手間が省ける。これに代わる仕組みを工夫しないと、入試はなくなせない。

文部省は、入試をなくす気があるのか。期待できないと思う。中教審の答申には「過度の受験競争を緩和する」とある。「適度な受験競争ならあってよい」と認めてしまっている。文部省に改革を任せられないのなら、国民が立ち上がるしかない。

大学入試のおかげで、偏差値による大学ランキングが、日本人の頭のなかにしみついていて。よい大学、一流大学とは、入試の難しい大学のこと。教育や研究のレベルは、どうでもよい。入試偏差値が高ければ、大学もそこに勤める教授たちも、ラ

同じ人数を、四年後に卒業させないとならぬ。私立大学でも大きな意味をもっている。国立大学では定員どおりに学生を入学させる必要がある。人数が多すぎても、少なすぎても怒られる。しかも、入学したの

文部省の決める学生定員は、国立大学の教員数・予算配分の基礎にならなくて、私立大学でも大きな意味をもっている。国立大学では定員どおりに学生を入学させる必要がある。人数が多すぎても、少なすぎても怒られる。しかも、入学したの

文部省の決める学生定員は、国立大学の教員数・予算配分の基礎にならなくて、私立大学でも大きな意味をもっている。国立大学では定員どおりに学生を入学させる必要がある。人数が多すぎても、少なすぎても怒られる。しかも、入学したの

入試をなくすと、有名校に学生が殺到する心配がある。そこで、期末試験の問題や合格点を事前に公表しておく。卒業の見込みがないのに入学しても学費を払うだけ損である。それでも教室に入りきらない大学は、最初は通信教育にし、半年後の

入試をなくすと、有名校に学生が殺到する心配がある。そこで、期末試験の問題や合格点を事前に公表しておく。卒業の見込みがないのに入学しても学費を払うだけ損である。それでも教室に入りきらない大学は、最初は通信教育にし、半年後の

入試をなくすと、有名校に学生が殺到する心配がある。そこで、期末試験の問題や合格点を事前に公表しておく。卒業の見込みがないのに入学しても学費を払うだけ損である。それでも教室に入りきらない大学は、最初は通信教育にし、半年後の

け無駄だ。こうして大学はデイズニランドと化した。

学生をきちんと教育し、専門の学力が足りない学生はどしどしふるい落とす。そういう当たり前の競争が大学にないので、そこに入学するための競争がすべてになった。高校以下の教育もめがめられた。

従って、正常な大学教育をとり戻すための第一歩は、学生定員の廃止である。

各大学はあらかじめ、卒業予定の人数や必要な学力を決めておき、学生を自由に入学させる。そして進級試験でふるいにかけ、留年・中退させる。これを、キックアウト制とよぶ。キックアウトされた学生は、もつと卒業のやさしい大学に転校する。単位を持ったまま簡単に転入学できるような制度も整える。

期末試験でははっきり退学させる。アメリカの大学がやっているように、TOEFLや高校の成績などを参考に入学者をしぼってもよい。そうすれば数年で「混雑現象」も落ち着くはずだ。

卒業後数十年かけ返済

もうひとつ、奨学金の充実も大切だ。大学の学費は安すぎる。ほんとうはもっと経費がかかっているのに、原則として学生がそれを負担するようになる。入試なしで入学する以上、社会に負担をかけてはいけない。学費はいまの数倍になるだろうから、全員が奨学金を受けられるようにする。

いまの日本育英会の奨学金は、金額も人数もわずかすぎる。これを大

学ごとの奨学金に改め、銀行から直接学生本人に貸し付ける。これを、卒業後何十年かけて返済する。学生は、これだけお金をかけて大学にいることの意味を考えなおし、本当に学ぶ必要がある人だけが大学に来るようにするだろう。

大学の成績がよければ、奨学金の条件もよくなるように、ランクをいくつか設けるとよい。特に優秀な学生は、学費を免除したり、逆に生活費を給付したりする。そうすれば、優秀な学生がどの大学にもまんべんなく散らばり、大学間格差が縮まるだろう。また企業は、よい奨学金を受けた学生なら、安心して採用できる。条件のよい奨学金は、「優」と違つて乱発できないから、スクリーニングの基準として信頼できる。

奨学金は、社会全体からみれば、将来への投資である。当面、景気対策として減税や赤字国債が必要だが、奨学金(銀行から学生への長期ローン)は、両親の可処分所得を増すので、減税と同じ効果がある。その規模は、三百万人に年間三百万円強として約九兆円。しかも将来世代への健全な貸し付けだから、やがておつりがついて戻ってくる。

以上が、大学の教育改革のあらましかだ。研究の活性化も大切である。それにはまず、研究ポストや研究費の配分を、実績に応じた公正な競争の仕組みに改める。論文も書かずに定年まで教授のいすにぬくぬくとしていられるいまのシステムは、若手研究者の犠牲のうえに成り立っている。外国の人びとにポストを公開することも大切だ。

大学を改革すれば、日本の教育はよみがえる。国民の皆さんの後押しをお願いします。

# 避けられぬ抜本改革

日本の激しい受験競争は、長い間教育改革議論の中心課題になってきた。中教審は近く、「高校教育と大学教育の接続のあり方」について改めて審議に入るが、今、注目されるのが「大学入試の廃止」を明確に打ち出した社会経済生産性本部の「教育改革に関する中間報告書」だ。廃止論をめぐり、起草の中心になった社会学者で東京工業大学教授の橋爪大三郎さんに、その意図と手法を聞いた。

## ■空洞化した小中教育

瀬戸 なぜ入試廃止ですか。  
橋爪 目的は二つあります。小中学校の教育の正常化と、大学を内実のある教育機関として再生させることです。  
初等中等教育と高等教育とは本来別のもので、初等中等教育はだれもが受ける教育。高等教育は一部の人のものです。歴史的には高等教育の方が先に出来た。初中はごく最近。日本では明治時代です。当時、両者は必ずしもつながっておらず、小学校は小学校で完結していた。



# 大学入試廃止論

論説委員 瀬戸 純一

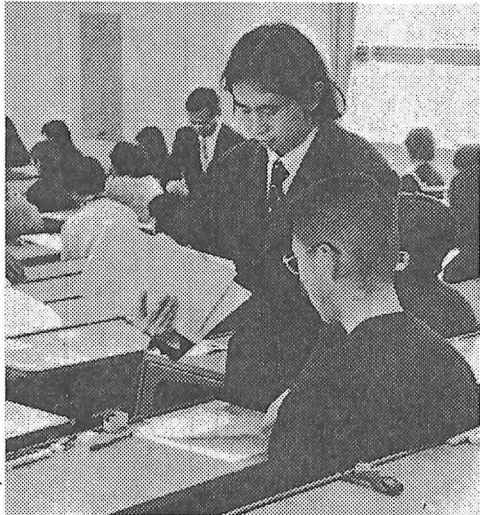
## 実現へ前向き議論を

ところが戦後、大学が大衆化してきてから、それがくついつい、小、中学校が、上の学校へ進学するための準備の場になってしまった。学校が空洞化して塾で進学のための学力を身につけようとなってしまう。これを元に戻そうということだ。日本のように高度に発達した産業社会では大学や大学院で専門知識を身につけた人材が必要

とされずから、大学で勉強するための競争は当然あつていいが、それが大学の入り口で、入試という形で起きている。大学の中でも、出てからでもない。瀬戸 大学に入ったところで競争は終わり、勉強は打ち止めでなくなるわけですね。大学審議会は、大学生はもっと勉強しなさい、と呼びかけていますが、橋爪 後ろ向きですね。私は

競争がよくないから大学入試をなくせと言っている。競争する場所が間違っていると云っている。大学の中で、学生はもっと学力で競争すべきです。大学同士は、教育や研究の成果をめぐって、もっと競争すべきです。今は、いい大学が入試の難易度で決まっている。それ以外に競争が働かない。これをやめようということだ。

瀬戸 具体的には、学生定員の廃止。それと入学してからの単位認定、卒業認定を厳しくするという考え方でですね。  
■最大の理由は定員制  
橋爪 入試をなくせない一番の原因は、学生定員の制度なのです。定員の運用は硬直的で、多すぎても少なすぎても文部省に怒られる。しかも勉強しな



今年の岩手県立大の入試風景。同大は「考える力」をみることができないとの理由で、国公立では初めて大学入試センター試験から一部離脱することを決めた。

## ポイント

- ①大学入試は、大学がごく一部の人のものだった時代のシステムであり、大衆化した今は、意味がない。廃止すべきだ。
- ②具体的には、学生定員を廃止。入学後の成績が基準にみえない者は、留年・中退させるキックアウト制を採用する。
- ③競争は、大学に入ってからやればいい。高校の学力を身につけているかどうかは、教科ごとに資格試験を新たに実施して判定。
- ④新方式では、混雑現象はおきかない。ただシステムを柔軟化して中途編入を容易にしたり、国立、私立の区別をなくすなどの工夫が必要だ。



瀬戸純一・論説委員

でも定員のまま全員が卒業することが原則となっている。この結果、大学教育が空洞化した。大学生がエリートだった時代には、一人の落ちこぼれもなく社会に出て活躍してほしいというのが国民の願いでした。しかし大衆化した今は違います。大学の中に競争があつて、選り抜かれた人が専門職につくべきだ。そのチャンスを与えての人に開くのが、今の大学の役割だと思えます。  
卒業を厳しくするために私たちは、入学後の成績が基準にみえない者は留年・中退させるキックアウト制の採用を提案しています。制度の採用に先立って大学はカリキュラムを公開し、期末試験の問題や合格点を事前に公表しておくのです。卒業できる自信と覚悟のある人が入学することになります。

瀬戸 入試廃止論に対して、教育現場や専門家の間から、批判や懸念も出ています。一つは入試がなければ勉強しなくなる、基礎学力が落ちる。大学入試には一定の学力水準が必要だが、それだけでなくレベルが下がっているのに、入試をやめたのでは、世界の中でやっていけなくなるというものです。  
橋爪 大学入試がなくなると試験が一切なくなると思うとすれば、それは誤解です。試験には競争試験と資格試験の2種類があるのです。競争試験は何番まで合格させるか順番をつける試験。資格試験は合格点が決まっています、それを上回れば合格です。学力を身につけたかどうか測るのは当然資格試験です。高校についても資格試験をやるべきだ。大学入試は代わりにはなりません。入試のレベルはバラバラだから、一定の学力が維持できる保証はない。  
競争は、本来自分の得意な分野でやるべきです。得意な分野が職業になるわけだから、得意な分野を伸ばして、医者や法律家のある人は医者や、法律に適性のある人は法律家に順番になれればいい。それをいっしょくたにして高校までの勉強でどれだけ頑張ったかで選抜するのは不合理であり、社会的な無駄です。そういうタイプの競争試験で選ばれるのは、人のいうことをよく聞いて、コツコツと何でも勉強するゼネラリスト。リストラにあいそうなサラリーマンが大量に養成されてしまう。競争は得意な分野で、専門で、つまり大学でやるべきなのです。



# 無意味な競争の入り口



はしづめ・だいさぶろう 1948年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。東京工業大学教授(社会学)。著書に「言語ゲームと社会学論」「はじめの構造主義」などがある。

## ■有効なキックアウト制

瀬戸 入試廃止批判のもう一つの視点は、考え方は分かるにしても、施設や指導体制面で現実的に無理なのではないか、というものです。学生が都市部の有名大学に集中して大混乱になるのではないかと、という懸念は当然出てくるとは思います。

橋爪 国民の知恵を甘くみて、いるように思います。そんな大混乱にはならない。なぜ複雑現象が心配になるかというと、今までの常識を新しい教育システムに当てはめるからです。今までは、入学すれば卒業できる。しかし、キックアウト制では入学しても卒業できるかどうか分からない。卒業できなければ学

東京工業大教授 橋爪大三郎さん

## 重視すべきは専門性

費は払い損だし、入学しただけでは社会的評価は得られない。だから、入らない。

大学にとっては、卒業生の学力レベルと人数を厳重に管理する。でも私は、民間にやらせた

のシステムを変え、資格試験にして、それに充てることは考えられませんか。

橋爪 それも一つの考え方で、でも私は、民間にやらせた

ることが、とても大事になる。有効なのは、高校の教科内容の達成度テストです。多くの国で統一した資格試験を工夫してやっている。日本でも教科ごとに絶対評価の試験を新たに作ってどうか。大学がそれを利用してこの教科で何点以上の人をと入学者をしぼることもできる。

瀬戸 大学入試センター試験

方がうまくいくと思う。センター試験は大学側がやる入学試験です。発想が違うから、衣替えは難しいのではないかと。達成度テストは、高校の教育ができていないかを判定するのだから、大学がやるのは筋違い。高校側がやらなくてはならない。民間機関がやってもよい。

瀬戸 キックアウト制なら、

大学間の単位互換を徹底すると、か、硬直的なシステムを相当柔らかにしないと機能しない。

橋爪 原則、単位は互換できなければいけない。中途編入を認めるとやはり混雑現象を心配する人がいますが、同じ理屈でカバーできる。

瀬戸 もう一点、私立大学を含めて一斉に入試廃止ができる

転入学が容易にできるようにしないと行けないですね。他大学で取った単位を認定するとか、

の、という問題がある。国公立と私立では財政構造が違う。現実問題として私立は、程度の

### 社会経済生産性本部の教育改革中間報告書の骨子

● 具体的な改革提案

① 高校教育の機能を回復し、学校が教育の場としての機能を失っている。その原因は、学校、生徒、家庭のあいだの「連帯の欠如」である。学校の場に連帯を回復し、選択の自由と自己責任により学校の教育機能を回復するために

② 公立の小中学校の学区制を廃止、親・生徒が学校を自由に選択できるようにする。

③ 校長がリーダーシップを発揮して、教師との連帯による教育ができるように、校長に学校経営権を与える。

④ 大学の定員制度を廃止し、大学入試をなくす。キックアウト制を導入する。

⑤ 文部省はこれまでのように教育のプロセスを直接的に管理するのではなく、学校、親、地方自治体、地域社会などの能力を信じて、それを間接的に支援するように発想を転換する。

に行っても、学費を払わずにすむでしょう。大学の成績と連動させて条件を変える。優秀なら返還免除にしてもいい。

瀬戸 入試廃止は破天荒な提言ではない。それに近い形でやっているところもあります。結局、教育の現状にどれだけ危機感を持っているかにかかっている気がしますが、難しい問題が多く混乱も避けられないだろうがここまで徹底しないと、出口は見つからないのかもしれないとも思います。中教審などは従来のように非現実的とはねつけるのではなく、土俵が上がって議論してほしいと思います。

橋爪 教育の専門家は、現状維持でいいと思いがちです。でもそんなものではない。深いところで危機感を感じています。

入試は、大学がごく一部の人のものであった時代のシステムです。私たちは今、最終報告をまとめる作業をしています。入試廃止は、実現可能かどうかという論拠を補強していきたい。一斉にはなく、どこかでまずやってみないかという話になるかもしれない。仮に先導的試行でやるとしても、全体でできるというのを証明するものでなければいけない。やってみれば、必ずうまくいくと思えます。

次回のこの欄は16日に掲載します。

# 学校教育の敗北



はしづめ だいざう  
橋爪大三郎  
(東京工業大学教授)

日本の教育について、いまいばん心配すべきなのは、ま  
ず学力が低下していること、そして、勉強する意欲が低下し  
ていることであろう。

学生はどんどん勉強しなくなり、現代社会を生きていくた  
めに必要な最低限度の学力すら身につかなくなっている。意  
欲の低下はさらに深刻だ。問題は勉強にかぎらない。社会人  
として生きていくための積極性、自分の人生を組み立てよう  
という積極性が、現在の日本の公教育のなかでは育ちにく  
い。この二つが、現在の教育が抱えているもっとも重要な問  
題ではないだろうか。

大学教育はともかく、明治以来の教育、とくに初等・中等  
教育は比較的成功してきたという人たちがいる。彼らの主張  
はこうである——アメリカのような社会では学力の低下が著

困家庭もある。つまりアメリカの教育の問題点は、家庭の教  
育力が十分ではないところにある、教育のシステムの問題  
とはいえない面がある。

教育のあるべき姿とは、子供が本来もっているはずのもの  
を、その本人の個性に応じて十分に引き出すことにある。そ  
れは成人するまでのあいだに、いや成人してからも繰り返し  
チャンスを与えて、本人の能力を最大限引き出すということ  
でもある。

大学を卒業した段階で、どれだけ自分の持ち味を出せたか  
を比較すれば、日本よりもアメリカのほうが、はるかに健全  
な大人を育てているのではないか。この点に関して日本は必  
ずしもうまくいっていないように思えるのである。

## 日本の学校は社会ではなく監獄である

日本の教育がうまくいかないのはなぜか。学力が低下し、  
意欲をなくしてしまう根本の原因は何か。一言でいえば、そ  
れは日本の学校が「社会」ではないからだ。

社会とは何か。それは、人間と人間が独立した人格として  
出会い、相互に影響し合う場である。そこで人は関係し合  
い、信頼し合い、互いに成長していく。学校も教育も本来そ  
うあるべきなのである。

ところが日本の場合、教員が勝手なことをしないように校

しく、小・中・高の教育は完全に失敗していると言ってい  
い。その点、日本のほうがむしろうまくいっているのではあ  
り、アメリカは日本を真似しようとしているほどだ。なぜ日  
本は教育を改革しなければならぬのか。改革したら、きつ  
と日本の教育は大学どころか小・中・高まで駄目になつてし  
まうだろう——。

このような考え方に、私は必ずしも賛成できない。たしか  
にアメリカの初等・中等教育は、一見うまくいっていないよ  
うに見える。しかしそれは、アメリカの家庭の多様性、民族  
の多様性に起因するところが大きいのではないか。たとえば  
家庭ではスペイン語を話している子供がたくさんいる地域  
で、授業を英語でするなら、当然低学力の問題が起る。また  
アメリカの家庭状況はいろいろ複雑で、離婚も多ければ、貧

長が見張り、校長が勝手なことをしないように教育委員会  
が、教育委員会を文部省が見張るといふ関係になっている。  
現場ではほとんど裁量の余地がない。教員も校長もただの管  
理者に随し、人格が消え失せてしまっている。学校で教育が  
成り立たないのは当然のことなのである。

現在の学校は、学校の外にある見えない何かによって監督  
されており、それが当り前になっている。子供たちが一方的  
に監視されるだけの場所、つまり監獄になってしまっている  
のだ。これは社会ではない。彼らが勉強する目的を自分で擲  
むのに困難を覚えるのは当然であろう。

子供たちになぜ勉強するのかと聞くと、たいがい、さもな  
いと上の学校に進めないから、就職できないからと答える。  
勉強そのものが大切であるとはけっして思わない。だから必  
然的に、そこそこ勉強はするけれど、ほんとうは勉強したく  
ないと思うようになる。

それでも低学年のあいだは、言われたとおりにやるからう  
まくいく。むしろうまくいきすぎるほどである。ところが一  
人ひとりの人格が形成されていくにつれて、生徒は反抗を始  
める。中学では校内暴力、高校では中退、不登校。大学には  
行かずにほかのことをする。大学に進んでも勉強せずに遊ん  
でいる。不思議なことに、自我が確立するのと並行して勉強  
の意欲がなくなっていくのが、日本の教育なのである。

だから、はじめのうち成功しているように見える日本の教育



も、最終的には成功していない。一方で、一見失敗してよ  
うに見えるアメリカの教育は失敗しているわけではない。ア  
メリカの高等教育は日本よりずっと機能しているのである。

### プライドを育てる教育

また、小学生は小学生らしく、中学生は中学生らしくなど  
と言う人々がいる。まったくの間違いである。小学生は放っ  
ておいても小学生なのだから、小学生らしいのであり、それ  
以上小学生らしくする必要はない。むしろ小学生の段階で学  
んでおくべき一人前の社会人としての基礎があるはずで、そ  
れを学ばなければならぬ。中学生も同じだ。

こうした「らしく」の教育は、じつは子供を差別し蔑視し  
ているのであり、子供の成長を阻害している。たとえば最近  
の若い人たちは、サラリーマンや社会人とは違った、いわば  
「子供の服」を着ている。渋谷系のファッションなど典型的  
だ。しかし、あのような服装でまともな仕事はできない。そ  
こに隠されている若者たちの深い心理はこうであろう。自分  
のなかにある未熟さや幼児性を保存しておきたい。学校に適  
応したり、社会人になったりすればするほど自分が失われて  
いくと恐怖しているのである。社会化する前の自分はまだ何  
者でもなく、確立した個ではないにもかかわらず、彼らはそ  
ういうものを信じて、そこに引きこもろうとする。これが教

育の失敗でなくて何だろう。

日本の教育はこういう態度を大量に生み出している。消費  
社会のなかで、さらにそれを増幅させているのがマスメディ  
アである。

最近では子供の人数が少なくなった。だから兄弟同士の情報  
交換が少ない。事実上一人っ子も同然である。おまけに近隣  
のグループもなくなって、道端で遊んでいる子供を見かけな  
くなった。また家庭の教育力も下がっている。共働きだった  
り父親が帰るのが遅かったりして、コミュニケーションが難  
しくなった。こういったすき間を埋めているのがマスコミな  
のである。

ところがマスコミは普通の人生に価値をおかない。報道さ  
れるのはまず犯罪である。バラエティー番組には極端な変人  
や、社会に不適応なタレントが登場する。そしてマスメディ  
アは責任をとらない。マスメディアは子供を怒らせない。だか  
らマスメディアは教育できない。親は怒るから子供を教育で  
きるのだ。

とはいえマスメディアは現代社会に不可欠なもので、今後  
発展していくことはあってもなくなることはない。問題は、  
マスメディアがあることを前提に、子供がうまく成長してい  
くにはどうしたらいいのかを考えることである。少なくとも  
いまの学校は頼りにならない。となれば、家庭しかない。

親は子供に対して何を教えられるのか。「あなたは世界

に一人しかいない、あなたが生れてよかった。私はあなたの  
ことを誇りに思っている」と言えばよい。「あなたのことを  
愛している」と言いたいかもしれないが、それだけでは子供  
は育たない。愛情と親のエゴとは紙一重なのである。親は子  
供が大事だと言う。学校に行ってみたらお前なんか虫けらだ  
と同級生にいじめられる。このギャップがあるのに、親がい  
くら子供を愛していると言っても、学校では何の助けにもな  
らない。より深く傷つくだけである。

プライドとは、親が身近にいらなくても、自分は自分だと  
いうことに誇りをもっている状態である。小さな子供はふつう  
そうである。わけもなく自分はいちばん腕力があるとか、走  
るといちばん速いとか、勉強もよくできるにちがいないとか  
思っている。それは現実的ではないけれども、プライドが育  
っていくのはそこが原点である。

社会での集団生活とは、プライドをもった大勢の人間が集

まっている状態だ。傷つきやすい自尊心をみんなで尊重しな  
がら、集団生活を営む。これが小学校の課題なのである。多  
少のリスクは覚悟しつつ、小・中・高校をあえて社会と同じ  
構造にしなければならぬ。もちろん社会にもいろいろ問題  
があるように、教室にもいろいろ問題が起る。だからこそ、  
社会はこういうものであると、問題を含めて学ぶことができ  
るはずである。

学校をきちんと社会として運営していくためには、教師と  
校長、それに親の緊密な協力関係が必要であろう。親が責任  
をもって学校の選択をする。また学校の運営、経営に責任を  
とる。具体的に言えば、校長を選ぶ。駄目な校長だったら辞  
めさせる。こういうプロセスを持ち込むことによって、親が  
教育の主体であることをはっきりさせることが改革の出発点  
である。文部省に代って親が、目に見えるかたちで学校に関  
わるようになること、これが教育改革の第一歩なのである。

二〇〇点の図版による日本文学史総説!!

## 図説 日本の漢字

角筆とは何か。片仮名・平仮名はなぜ生まれ  
たのか。文字の無い国・日本に「漢字」が来て  
から現在までを、最新の国語学・考古学の成  
果から明らかにする。

小林芳規 著  
B4変型判・上製・函入・216頁  
特価本体15,500円(本体17,000円)  
※特価期間は、'99年5月末日までです。

おしおブックス(11月発売)

### 近代中国の思索者たち

佐藤 慎一 編  
近代中国の代表的な言論人20人の、  
多様な思索の軌跡を追い、その意味  
を探ることで、思想の流れを描く思  
想史入門。  
●四六判・256頁・予価1800円

### 千支の漢字学

水上 静夫 著  
私たちの生活・習慣の中に定着して  
いる「千支」の原理について、漢字学  
の視点からとらえ、図版を多用して  
平易に解説した。  
●四六判・272頁・予価1800円

### マカオの歴史

南蛮の光と影  
東光 博英 著  
マカオと日本の関係は、今では想像も  
つかないほど緊密であった。ザビエル、  
フロイス、キリシタン大名、天正少  
年遣欧使節等、興味深いマカオ史。  
●四六判・224頁・予価1700円

### 漢詩のことば

向島 成美 著  
著名な漢詩の作品の中のことばをテ  
ーマとし、その詩語としての歩みと  
広がり豊富な用例を引用しわかり  
やすく解説した。  
●四六判・280頁・予価1800円

### 封神演義の世界

中国の戦う神々  
二階堂 善弘 著  
明代に書かれ、今も中国文化に影響  
を与え続ける小説「封神演義」。成  
立や登場する神々の由来などの考察  
を通して、その魅力に迫る。挿絵多数。  
●四六判・216頁・予価1600円

## 大修館書店

〒101-8466 東京・神田錦町3-24 (価格には税別)  
http://www.taishukan.co.jp  
書店にない場合やお急ぎの方は直接ご注文下さい





# 来春「解禁」の公立中高一貫校

# 難しい特色探し

法改正で公立の中高一貫校開設が「解禁」となった。全国の状況をみると、三重県と岡山市で来春開校し、秋田市でも2000年春開校に向けて準備を進めている。三重県のケースは町立中学校と県立高校という異なる自治体をつなぐ「連携型」で、岡山市と秋田市では同じ市立の中・高校をつなぐ「併設型」になる。ただ、それ以外の自治体は積極的に検討中というところもあるが、おむね慎重だ。

三重県は飯南町の県立飯南高校と飯南、飯高両町の3中学の間で「連携型」の中高一貫教育を行う。県教委によると、現在普通科の飯南高を来年度から総合学科に改編する。飯南高と3中学の教員が相互に交流しながら、郷土の歴史、文化、産業などを6年間通じて学ぶカリキュラムを組む。2000年度からは、この3中学を卒業して飯南高進学を志願する生徒は面接など学力検査以外で選抜する。それ以外の中学からの志願者には従来通りの学力検査を実施する。岡山市は生徒減少が続いていた岡山商業、岡山工業の市立定時制高校2校を統合し、新設する中学校と来春から一貫教育を始め

る。秋田市では来春に中学校を新設し、2000年4月

公立の中高一貫校 昨年の中央教育審議会の答申を受けて、改正学校教育法が6月成立し、来春から自治体の判断で導入できる。形態としては①新設する6年



開校5年目の宮崎県立五ヶ瀬中学校・高校

都県と政令指定都市の横浜市が、これまで同省の「中高一貫教育実践研究」事業の一環として実践協力校を指定している。ただ、長年の懸案だった公立校の中高一貫教育が、来年度から実施できるようになった割には、都道府県教委や学校現場の反応は鈍い。実践協力校を指定した都道府県の中にも「設置するかどうかはまだ白紙(千葉)」「設置を念頭に置いた検討はしていない(鳥取)など」という県もある。

また前向きな自治体にもそれぞれの事情がある。三重県飯南、飯高両町は少子化と林業離れによる後継者不足を解消したいという思惑があり、岡山市のケースも対象校は生徒減少が続いていた。島根、長崎なども中山間地や離島の学校を中高

と高校は設置主体や文化が違ったりといった環境がある中

## 「進学校化だめ」で実施少数

に併設の高校を開校する方針で準備を進めている。

文部省によると、宮城▽秋田▽栃木▽千葉▽東京▽

- 神奈川▽新潟▽石川▽福井
- ▽山梨▽岐阜▽愛知▽三重
- ▽奈良▽鳥取▽島根▽山口
- ▽香川▽高知▽佐賀▽長崎
- ▽大分▽鹿児島▽沖縄の24

は「設置の予定はなく、特

## 先行実施、5年目の宮崎県

## 中3修了時「卒論」も

特例的に先行した全国初の公立中高一貫教育校、宮崎県立五ヶ瀬中学校・高校は1994年、県の山村地域の活性化策「フォレストピア宮崎構想」の中で開校

が、4年目から高校入試を

た体験活動をカリキュラムに組み込んだ。中学では地元のお年寄りを講師にわらじ作りをしたり、高校では化石掘りや天体観測を兼ね、中1から高2まで年間70時間あるこの「フォレストピア授業」が特色だ。

また中3は12月から3カ月間、高校受験勉強の代わりについて大学の卒業にあたる卒業課題研究がある。

【後藤 潔貴】

入学希望者は毎年3000〜4000人。小学校長の推薦調書を添えて応募する。選抜検査は面接や作文のほか仲間と協力する壁新聞作りなどで、教科の学力検査はない。

教頭によると、選抜の重要なポイントは6年間を頑張ることができ、意欲や協調性。「小学6年生の段階での判断が、その後の6年間を決める。本人はもちろん保護者も十分理解して、慎重に決めてほしい」とい

平成10年(1998年)8月22日(土曜日)

### 愛媛政経懇話会第263回例会

愛媛政経懇話会の第263回例会が二十一日、松山市本町二丁目の南海放送本町会館であり、社会学者橋爪大三郎氏が「青少年の心と現代の社会」と題して講演した。橋爪氏は神戸の連続児童殺傷事件や少年のナイフを使った凶悪事件に触れ、現在の少年をめぐる諸問題は「教師、親、子供の信頼関係が断ち切られている無連帯から起きている」と分析。高校、大学入試の廃止や、高校の統一卒業試験の導入などを訴えた。

社会学者 橋爪大三郎氏



#### 講演要旨

連続児童殺傷事件の少年は特殊な性格を持っているか。と思われ。しかし、マス また、ナイフを所持する

コミなどのアンケートで三、四割ほどの青少年が共

少年も増えている。若者が集まる渋谷では、ナイフを持つ者は弱虫とみられていたが、七、八年前ごろからは、かっこいいという見方に変化した。アンケートによると「護身用」という理由で持つようになっているが、何から身を守るつもりなのか。

栃木県の黒磯北中の女性教師刺殺事件は、少年が遅刻を注意されるといふことで短時間のうちにキレ、女性教師をナイフで刺した刺しにしている点で特徴的

### 青少年の心と現代の社会

である。ナイフで切られても軽いけがで済み、学校がもみ消したナイフ事件も全国にはいっぱいあるのでは

成金も廃止すればよい。授業料を三十年払いくらいで済ませたい。詰め込み教育をやめる気はなく、締め付けをちよっとゆるめるだけ。子供の心がすくむのは大人が何もせず、学校が収容所になっているからだ。とりあえず産業社会に役立てばいいと、教育を思想的、哲学的に掘り下げてこなか

## 「無連帯」の学校

### 高校・大学入試廃止を

う。

中教審の「ゆとり・生き生き」の教育」という目標

次回例会は九月二十五日。慶応大学総合政策学部教授の草野厚氏が「アメリカ中間選挙の行方と日米関係」と題して講演する。

これまでの自分と、規範が解体していること。これからの自分と、つまり社会学でいう「無連帯」。頑張っても結果の要らない。むしろ、全国統一の人格の連続性。度で、生徒同士の足の引く張りが合になり、内申書で表面だけ服従させられていば、分数の計算すらできない。教師間では互いに授業のチェックができず、教師生徒の間には信頼がない。これら問題をほったらかして、受験制度はか

はしづめ・だいざい 1948(昭和23)年生まれ、神奈川県出身。47年東京大学卒業。52年同大学大学院博士課程終了。フリーで執筆活動を続け、性、権力を三つの説明原理とした「記号空



橋爪大三郎東京工業大教授に聞く

# 不況は自己変革のチャンスだ

不況には、景気循環と構造不況の側面がある。景気循環ならば、放っておいても時間がたてば回復するが、今回は、構造問題が絡んでいる。構造不況は、構造改革をしないと弾みがつかない。

金融などいろいろな分野で外国資本が日本に流入し、長期的に定着すれば、不況は早く終わるのではないか。そのためには、日本が、構造改革に踏み切ったという信頼が寄せられなければならない。

企業にとって、不況は事業拡大のチャンスだ。失業している優秀な人を安い賃金で雇うことができ、地代は安く、融資も低金利で受けられる。不況の時は、好況の常識が通用せず、消極的になりがちだが、優良企業は積極的にになれる。優良な企業が成長し、不良企業が淘汰される、というのが不況の本質だ。

不況で生き残る企業は、同業他社より経営体質の強いところ。他社が潰れたお陰で生き残ることもあるが、より強い経営体質を目指して自己変革を遂げないと、次の不況で潰れる。

失業については、日本も国際社会並みの水準になった。失業は、再就職さえできれば怖くは

ない。むしろ、倒産しそうな企業から、成長企業に再就職できれば、歓迎すべきことだ。安定を求めるのが人間の常なので、多くの人は転職に抵抗があるけれど、失業すれば、そうはいっていらなくなる。失業をきっかけにキャリアアップを図ることもできる。

行政にやってほしいのは、長期の投資計画、特に都市計画づくりだ。都心に二戸当たりの面積が現在の二倍ある集合住宅を建設すれば、家具などの生活用品も売れる。国民は、「所有」という考えを捨て、ライフステージに合わせて移り住むという発想に転換する必要がある。

不況は、企業も、個人も、自己変革のチャンスと考えるべきだ。



はしづめ・だいさぶろう / 東京工業大教授 (社会学)。著書に「言語ゲームと社会学」など多数

## ■「大学改革」で景気浮揚

橋爪大三郎 (社会学者)

現在、学生1人当たりにかかる大学の経営コストは年間約300万円といわれる。4年間で1200万。誰がそのお金を出しているかといえば、学生の親と国である。親が大学に支払う学費と国の助成金で学生たちは大学に通えているわけである。これを全額、大学生本人に負担させ、親にはいっさい援助をさせないようにするというのが私の考える

「大学改革で景気浮揚」というプランである。年間300万円というお金を、当然、大学生たちが払えるわけがない。どうするかといえば、奨学金という形で、国の干渉のもと民間の銀行に貸し付けさせるのである。学生たちは、その後の人生の中で、その借金を返していけばいい。その代わりに入学試験はなし。お金さえ払えば誰もが大学に入れるようにする。親にあたる中高年の人からすれば学費分の出費が減るわけだから実質的な減税にあたる。経済負担の一番重い層への集中減税。現在、大学生は300万人いるから、300万円×300万人＝年間9兆円の減税である。当然、中高年の消費は増加する。学生たちは借りた金で勉強するわけだから、真剣に勉強する。成績がいい人はどんどん学費を免除されるといふシステムも合わせれば大学生のレベルはますます上がり、就職時には即戦力として社会からも期待されるだろう。この大学改革によって、金銭的に余裕のある中高年の大学入学組の増加も期待され、受験者減少に怯える大学にとっても朗報となるはずだ。



17歳以下、要注意！ もう大学は楽園ではない。その上…

# 大学改革で就職活動が辛くなる!?

「今だって受験勉強で大変なのに、大学でも勉強漬けなんてひどいよ」（都内私立高校2年・奈美子ちゃん）

10月26日、文部大臣の諮問機関・大学審議会の答申が提出された。その骨子は①厳格な成績評価など学部教育の見直し②年間単位登録数の上限設定③教育・研究を評価する第三者機関の設置など、むずかしい単語がズラズラ。

もっとわかりやすく説明してくださいな、文部省サン。「要するに、学生はもっと勉強しましょう、教員はもっと責任を持って学生を指導しましょう」ということなんです。つまり、学ぶことを改めて謳ったのが今回の答申の内容なんです」（文部省高等教育局企画課大学審議会室）

大学がレジャーランド化しと批判されて久しい。答申はその批判に答えるべく、学生に「オマエら、もうちょっと勉強せんかい。卒業させたらん」と迫るものなのだ。単位は試験だけでなく、宿

題やレポート、出欠状況も見

て厳しく認定されることになりそう。しかも、年間の単位登録数が制限されるため、1～2年でいっぱい受講し、3～4年でラクするというワザも使えなくなる。そう、つまり、これからの大学生は4年間みっちり勉強しなくてはいけないのだ。それが冒頭のような現役高校生の不満の声につながっているのだが、実はもうひとつ彼らが不安に思っていることがある。それは就職だ。

早稲田大学学生部就職課の杉浦一義課長がこう言う。「就職活動は就職協定の廃止で著しく早期化しています。以前は4年生のGW明けから採用活動が始まり、6、7月が主戦場となっていた。それが、今では3年生の2月頃から就職説明会が始まるというありさまです」

これまで、大学生は3年までに単位の大半を取り、余裕のある4年時に就職活動をしてきた。ところが、4年にな

ってもピッシリ授業があるとになると、それもできなくなってしまう。

大学側は、この点をどう考えているのか？  
「だから、理想はきちんとして勉強して、卒業してから就職活動ができるようにすればいいんです」（杉浦課長）

また、企業側も、「今の採用活動は確かに正常ではない。就職活動に左右されて学生が勉強できないというのは本末転倒。大学できちんと勉強している人材は企業もそれなりに評価しますよ」（日経連・鈴木正人教育部次長）

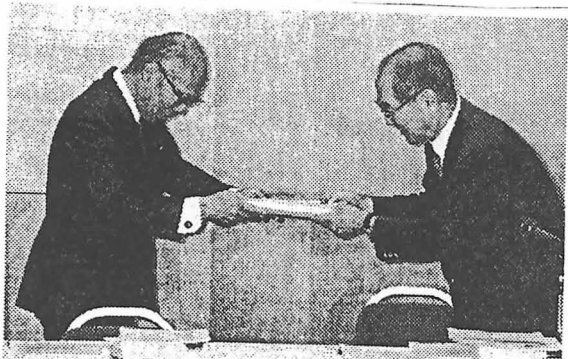
とはいうものの、9月の完全失業率は戦後最悪の43%、失業者は295万人に達している。大学生の就職戦線が厳しくなるのは確実で、内定を取るためには「ノンキに勉強なんてしては行かない」というのが学生たちの実感だ。  
独自の教育改革案を唱える橋爪大三郎・東工大教授がこう言う。

「だから工夫が必要です。例えば大学側は、インターンシップとして在学中に企業で働いたら、それも単位に認めるとか。」

また、大学を厳しくするならば、その代わりに中学・高校時代にたっぷりゆとりを与えらるべきです。今の日本の教育システムは、本来あるべき姿と正反対になっているんです。これを正すためには大学入試の廃止がどうしても必要ですが、今回の答申はそれに触れていない。この程度の改革では生ぬるい。これでは今の大学がまともな教育機関に生まれ変わるのには不可能です」

橋爪氏も指摘するように、日本の企業社会が混乱を深めるなか、学生が勉強することは今よりずっと大切になるはずだ。しかし、大学改革が目指すものと就職状況の実態にはまだまだミスマッチが多い。今回の答申は結局、理想

と現実のギャップの中で若者たちがもがくだけというトホホな状況を生みはしないか？  
この改革の実行は早ければ2000年4月、今の高校2年が大学生になる時から。お、17歳、今のうちに自分たちの意見も言っておいたほうがいいんじゃないか？



10月26日、「大学審議会」の石川忠雄会長(右)から有馬文相に答申書が手渡された

写真/共同通信社



おまけ

1998年(平成10年)9月1日 火曜日

新聞 新刊 日 月 日

### 大学入試改革 皆で後押しを

光市 末岡 律子  
(主婦 42歳)

先日(文化面)「これではくせる大学入試」の結びに「国民の皆さんの後押しをお願いします」とありました。その言葉と内容に心が動かされ、後押しの意味で投稿しました。

文部省の打ち出す改革には、常々「立ちを感して」いました。小中学校の改革より、大学入試改革が先だと思っていたからです。橋爪大三郎東京工業大学教授の入試及び大学の仕組み改革には大賛成です。

偏差値重視の大学入試では多くの人が心をゆがめられ、今も続いている「思いやり」の間には「思いやり」の人間、または出身大学で人をランクづけをする考えが、多くの人にみられています。私は「一児の母親ですが、

子育ての中で、自分が受験戦争でいかに失ってきたものが多かったかに気づかれています。これから二十世紀を生きていく子供たちのためにも、「心の教育」や「ゆとり」と言う前に、諸悪の根源である大学入試の改革をすすめてください。

大人が意識変革をし、立ち上がりなくては、同じことの繰り返しになります。子供たちのため、大学入試改革をするための後押しをしましょう。

具体的には、じきのように改革する。校長は学校の経営権をゆだねる。これは、小・中・高等学校にわたって必要な改革である。あわせて、学区制を廃止し、家庭(親と子)が自由に学校を選べるようにする。こうして、よりよい教育をめぐる競争が可能になる。

受験地獄、校内暴力、いじめ、不登校、ナイン少年、援助交際……。戦後教育のひずみと行き詰まりは、誰の目にも明らかだ。一刻も早く何とかしてこれという、若い人びとの悲鳴が聞こえてくる。

これまでも何回か、改革の試みはあった。しかし制度をいじると、以前よりも悪くなった。現在、中教審の答申に沿って、カリキュラムや制度の見直しが進んでいる。だが、「ゆとり」「生きる力」「心の教育」を看板に掲げる今回の改革は、教育を蝕む病巣の根本に手をつけず、小手先の対応療法にすぎない。本当の改革とはほど遠い。

それでは、教育が病んでいるその正体は何なのか? 「じき」の欠如である。学校がまともな教育機関として機能できないのは、そこに連帯が欠けているからである。連帯は、社会が成り立つための、人間同士の協力関係。信頼と信託である。校長が教師を信頼し、教師が親を信頼し、親が学校を信頼する。子どもが大人を信頼する。それが教育の原点なのではないか? 戦後教育は、人びとの連帯を信頼をむしり破壊してきた。制度

## 教育を変えれば日本は変わる

### 選択・責任・連帯への改革



橋爪大三郎

「じき」に、入試や偏差値でなしに、学力そのものを重視する。学力を身につけるのは生徒の責任で、学校はそれを手助けする。その原則を「ゆとり」ではなく、そのために、成績の相対評価(5・4・3・2)はやめて、絶対評価にする。高校入試は「高検」(高等学校学力検定試験)を導入する。さらに、大学入試をなくす。学生定員を廃止して、入学しやすくなる代わりに、進級・卒業を厳しくする「キックアウツ制」

おりの成果をあげることができているのか。いろいろな角度から、検討が加えられた。そして、この改革案こそ最善であるという結論になった。財団法人・社会経済生産性本部の「選択・責任・連帯」(提言二委員長)での議論である。私はその専門委員会、原案の起草にあたった。改革案は同本部が「選択・責任・連帯」の教育改革(中間報告)という小冊子として配布している。去る七月二三日には文部省で、記者発表も行った。文部省も改革を進めようとしている。だが問題なのは、文部省がいつまでも改革の主導権を握ろうとしていることだ。明治以来、文部省は、誰が何をいって教えるか(教育のプロセス)を決めてきた。このやり方が、初等教育の普及や急速な近代化に役立ったことは間違いない。けれども、高校進学率が96%、大学にも三人に一人が進学するいま、幽車が逆に回り始めた。もともと少数の人材に

を信用して、現場の工夫に任せ、教育のやり方を管理しすぎ、教師からやる気を奪ってはならない。だから校長(と教師のチーム)に、学校の経営を任せろ。校長候補者は、こういう教育をしますと、親たちに約束する。親は、よいと思う学校を選ぶ。教師たちは、共感できる校長のもとに集まる。こうして学校は、理想を掲げる校長とそれに共感する教師とで学校を選んだ生徒とそれを支持する親、の連帯の場となる。学校には、ここにいたくない人だけがいます。校長は親の信頼にたよるよりよい教育をしようとする力を、教師も校長に協力する。さもないと、その職を解かれてしまいます。こうした選択・責任・連帯の再構築が、教育の場を活性化させるだろう。

高検の導入と大学入試の廃止も同様に大切だが、詳しく入るスペースがない。ぜひ多くの方々に今回の案をお読みいただき、ご意見をいただきたい。生産性本部のホームページ(htt p://www.jpco-seid.or.jp/1w/1w09.htm)にアクセスするか、電話(03・33409・5000)で連絡すれば入手できる。(はじつめ・だいさかづつ=東京工業大学教授・社会学)

社会経済生産性本部(亀井正夫会長)が、「選択・責任・連帯の教育改革——学校の機能回復をめざして」と題した教育改革に関する中間報告書を発表した。大学入試の廃止や高等学校学力検定試験(高検)の創設、通学区域の廃止など、大胆な内容が盛り込まれた提言の中身を紹介する。

### 校長の権限強化徹底

社会経済生産性本部は、日本生産性本部と社会経済国民会議が統合して、九四年に発足。評議員には経済界、労働界の代表や学識経験者が名を連ね、二十世紀に向けた様々な政策提言や運動を行っている。教育改革については社会政策特別委員会(堤清二委員長)が検討を重ねて来た。

報告書は、「明治維新以後、ごく短い期間に初等教育を国民に普及し、国民の素養を高めたことは特筆に値する」と文部省の歴史的役割が高く評価しながらも、「文部省(政府)主導の教育の近代化は日本の教育に大きな歪(ひず)みをもたらした。自らの責任によって教育を行う親・学校・地域社会の主体性が阻害され、教育は窒息しかかっていく」と文部行政そのものを

## 生産性本部 教育改革へ提言

「いか」と言い切った。

が現在の教育荒廃の一因と見方を示した。そのうえで、「産業社会のための人材育成」という文部省の歴史的使命は終わったのではないかと指摘した。こうした立場から提案された改革策は大胆だ。小・中・高等学校改革では①学区の廃止②学校経営権を校長に③成績の相対評価をや

め絶対評価に④義務教育を各学校に割り当てるのではなく、校長は公募が原則。校長は親に教育プランを示すかは問題とはならない。高校を選ぶときの基準は、教育方針や教師陣の魅力、校風、課外活動などになり、高校教育の力にキリム多様化が実現できると言う。大学改革では①学生定員を廃止して入試をなくそう②学費制度を改革し、奨学金を充実させよう③大学の流動性、機動性を高めよう

# 教育

## 入試廃止や「高検」導入を

わす、中学の成績は絶対評価にすることも併記した。大学学費は引き上げ

提言の目玉の一つが、高校の導入だ。高校進学率の高まりとともに、高卒の資格が空洞化しているとして、高校教育の成果を測る外部基準として創設する。一定点以上取れば合格とする絶対評価で、高校卒業資格、つまり大学入学資格が与えられる。試験は年六回

——の三点を提言した。諸悪の根源と言われながら大学入試がなくならないのは、日本の社会で「これだけ難しい入試をパスしたのだから有能に違いない」という人材のスクリーニング機能を果たしているからだと、報告書は指摘する。入試に代わるより合理的で機能的な競争と人材選抜のシステムを作り出すため、大学学生定員は廃止。大学の門戸を広く開ける代

わりに、入学後、成績の基準に満たない者は留年・中退させるキックアウト制を採用する。

一部の大学に学生が集中する現象を避けるため、各大学はカリキュラム、各学年の期末試験の過去の問題や合格点を事前に公開する。入学しても単位が取得できそうになければ学費の払い損だから学生は入学しないし、単に入学しただけでは社会的評価は得られない。各大学の入学許可は書類審査で行う。

こうした制度をより実効あるものにするため、学費を教育コストに見合うような程度引き上げる一方、奨学金を充実する。在学中の負担が少なく済む十分な貸与資金を用意し、大部分の学生が何らかの奨学金を受けられるようにする。大学の成績に応じて貸し付け条件を優遇すれば、条件の良い奨学金を受けられる学生は名譽と社会的評価を得られ、勉学の強い動機づけにもなるという。

官民で協議必要

提言は、現在協議されている教育改革の内容から見るとかなり「過激」だ。実現性を考えれば首をひねりたくなるものもある。特に、高検導入や大学学費引き上げなどには、多くの異論が出そうだ。奨学金を学生が勉強する餌(えさ)にするという発想も日本の風土になじむのか疑問だ。

だが、仔細に見ると、通学区域の弾力化や校長の権限強化、公立中高一貫校導入による中高連携の強化、学生により勉強をさせるように求めた大学審議会答申など、すでに改革策として方向性が示されたものを、さらに徹底、先鋭化した内容のものも少なくない。この違いこそが、官主導と民間人の考える教育改革のギャップなのだろう。

ともあれ、今日の教育現場の荒廃はこれ以上放置できないレベルに達し、その改革は国民的課題である。文部省を中心とした「教育のプロ」ばかりに改革議論を任せおいてはいいはずが、今ほど、幅広い立場からの教育改革論議が求められる時はなく、来年の最終報告が目ざされる。

## 学校機能回復へ 文部行政は限界

の準備期間になってしまわぬよう、小学校は読み書き、そろばん、中学では英語と代官僚になってしまおう。創意工夫の余地がないから学校はつまらなくなり、学級崩壊や不登校、校内暴力などの問題が出る。塾や家庭教師の需要は伸びる。

——高検制度の狙いは、橋爪 高校が教育機関として最低限の機能を果たせるようにする。問題は基礎的なものにして、一年生で合格する子がいてもいいし、卒業間際に合格してもいい。

### 報告を振り返って



東京工業大学教授 橋爪 大三郎氏

に追随しないと上の学校に行けないのが、日本の教育システムだ。これでは現状にみんな満足していないの

### 創意工夫の余地ない制度が問題

中間報告とりまの中心となった橋爪大三郎東工大教授に話を聞いた。

は、運用が悪いからだ。——文部省に厳しいです

橋爪 現実には試験があるのだから勉強しなければならぬ。だから、高校時代は大

学入試の、中学は高校入試





橋爪 大三郎

東京工業大学教授

教育制度の矛盾が今、高校に集中して表れている。

戦後教育は、六・三・三・四制で半世紀やってきた。その間、高校進学率が飛躍的に高まり、96%に達した。義務教育は実質的に、十二年間に延長されたと言つてよい。

けれども制度上、義務教育は九年間のままなので、中高の力リキユラムは途切れている。入試もある。中高一貫にしようにも、小中学校は市町村、高校は都道府県と、設置主体が異なっていて、簡単ではない。

高校全入は結構なことだが、その反面、極端な学力低下が起こった。

高校入試は、一定の学力を保証しない。戦後すぐとは違って、進学率が上昇したいま、成績の悪い生徒でもどこかにもべりこめる(輪切りの)。上位校からいわゆる底辺校まで、偏差値による序列が確立している。

この結果、多くの高校で、まともな授業が成り立たなくなった。分数の計算ができない生徒、中一の英語

を忘れた生徒。それでもがまんして教室に座ってれば、卒業できる。不本意な思いで進学した生徒は、高校に入ったとたん、それ以上勉学する意欲を失ってしまう。高校入試は、なくてよい。

# 高校学力検定で教育再生

らだ。のみ込みの早い子ども、遅い子どもがいるのは当たり前だろう。それを画一的に教えれば、のみ込みの早い子どもは退屈し、遅い子どもはついて行けない。時間がかかっても、わかるまで教えるのが本当であり、本人のペースでゆっくりやればよい。本人が本人のペースで学んでいる限り、落ちこぼれはありえない。クラス単位の一斉授業は、教える側にとって効率的にみえるだけで、

高校の自由である。大学進学準備に、もっと高度な内容を教えるよりも、低学力の生徒のために小中学校の教科を復習してもよい。さまざまな資格を取るコースや職業教育コースを設けてもよい。そうしたアラールファの魅力に応じて、生徒は高校を選択する。そしてめいめいの学力と必要に応じた教育を受ける。

高校の学力を維持し、高校生に勉学の動機を与えるためには、高校学力検定試験(高検)のような資格試験が必要だし、それで十分である。

教わる側はいい迷惑、効果もあがらない。これまでは、生徒が学校に合わせてきたが、これからは、学校が生徒に合わせる番である。それにはまず小中学校から、個人ごとの時間割、能力別・進度別のクラス編成を取り入れるべきだ。

高検が定着すれば、出身高校は意味を持たなくなる。大学入試をなくして書類審査にしても大丈夫だ。こうして高校が、生徒一人ひとりを大切にしている教育の場に生まれ変わることで、日本は再生のきっかけをつかめるに違いない。

## 論点

高校の落ちこぼれの延長である。なぜ落ちこぼれが生じるかというところ、それは、個人差を無視してクラス一斉に、同じ内容を同じ進度で教えるか

そのうえで、高検を導入し高校卒業の資格に代える。高校の成績や卒業証書は、高校が自校の生徒に与えるもの。学力が足りなくても、恩情で卒業させることになりがちだ。一方、高検は、外部機関が行う資格試

高検は、高校に大幅な教育の自由をもたらす。高校は、生徒を高検に合格させないとだめだが、その役割さえ果たせば、あと何を教えるかは

社会学専攻。東京大学大学院を経て現職。著書に「はじめての構造主義」橋爪大三郎コレクション」など。50歳。